

2016 MHC 登山講習

アルプス登攀記

春・初夏の登山講習報告

2016MHC 登山講習「残雪の槍ヶ岳登山」から



主 催 NPO 法人 松本ヒマラヤ友好会《MHC》

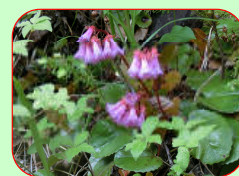
本部事務所 松本市島立 4539-7 TEL 47-6197 FAX 47-5685

E-mail : mhc@lily.ocn.ne.jp ホームページ : <http://www1.ocn.ne.jp/~mhfc/>

共 催 松 本 市 山岳観光課 TEL94-2307

後援 長野県教育委員会 松本市教育委員会

信濃毎日新聞社 朝日新聞松本支局 毎日新聞松本支局 読売新聞松本支局 産経新聞長野支局
中日新聞社 市民タイムス 松本平タウン情報 長野日報社 SBC 信越放送 NBS 長野放送
TSB テレビ信州 abn 長野朝日放送 テレビ松本ケーブルビジョン FM長野 長野県写真連盟



イワカガミ

目次

1. 2016MHC登山講習一残雪の常念岳報告	1
2. 2016MHC登山講習一花の奥上高地 報告	3
3. 2016MHC登山講習一残雪の槍ヶ岳登山報告	6
4. 2016MHC登山講習一内田良平山岳写真教室報告	8
5. 2016MHC登山講習一奥秩父 金峰山と瑞牆山登山報告	10
6. 2016MHC登山講習一花の八ヶ岳縦走報告	12
7. 2016MHC登山講習一夏の北岳報告	15

5月3日(土) AM6:30 県安曇野庁舎駐車場に8名が集合し、車に乗り合わせ出発する。天候は晴れ。新緑が眩しい登山口で準備を整え、AM7:40 登山道を一列縦列で出発する。10分程で、樹齢300年以上の橡の木が立つ“山ノ神”に到着。皆で手を合わせ、登山の無事を祈る。



常念岳の山の神に手を合わせる

雪残る岳樺林の登山道を登る

笠原附近支沢の雪崩跡と常念岳

一ノ沢沿いのダケカンバ林の中、残雪残る山道を登る。いたるところで夏道の崩落が見られ、痛々しい。2時間程登ると沢が合流し、デブリの跡が残る 河原に出る。展望が開け見上げると、豪快に聳える白銀の常念岳を望む。ここから10分程の上部で、アイゼンを装着して、雪に埋まる沢筋を直登する。



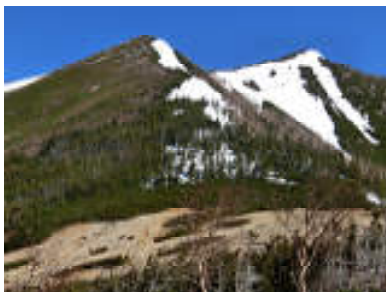
山頂を背景に乗越近くを登る。

乗越からの槍・穂高の展望。

5/4 強風と晴れの朝を迎える

一時間程の登りで森林帯を挟む二股に出合う。ここから左側の狭く急な沢筋を登る。一步一步雪を踏み登り続けると、一気に高度を稼ぎ、PM12:30 風が吹き抜ける常念乗越に登り出る。突然正面に、槍ヶ岳から穂高岳への白銀の稜線がその姿を現した。皆歓喜し今までの登りの疲れもいっぺんに吹き飛ばすようだ。

常念小屋で昼食後滑落停止の練習を行う予定だったが、強風と残雪量が少なく危険なため中止とし、小屋内で講習談義となる。見上げると山頂へ続く稜線には雪が全く無く岩稜があらわとなっている。



朝の横通岳

強風の中、山頂を目指す

登る右方向に雲間の槍ヶ岳を展望

5月3日(日) 晴の朝、しかし外は風速25m以上の強風雨が吹き荒れている。出発時間を遅らせ風が弱まるのを待つ事にする、1時間後のAM7:30、全員山頂を目指し出発する。岩がゴロゴロした夏道をたどり、体を迫り上げようとするが、風の勢に押し戻される。一步、二歩と進むのがやっとだ！。上部から、「風に飛ばされた、今日は諦めるよ」と言って、登山者が意気消沈して降りて来た。私達は、しばらく登り続けたが、これ以上は危険と感じ、6合目まで登るのが限界だった。登頂をあきらめ、下山を開始する。



6 合目付近、強風に押され、登山を断念する。



晴れていれば山頂から望む、白銀の穂高岳連の勇姿。

AM10：45、無事小屋に到着する。早めだが、暖かい昼食を摂り、心身をリフレッシュする。AM11：30 常念小屋から下山を始める。往路と同じ雪の一ノ沢ルートをし、滑落を注意しながら降下する。PM3：00 登山口に到着。PM4：00、参加者の車が待つ県安曇野庁舎駐車場で解散とする。

「春浅い山麓と、残雪の常念岳。北アの白銀に輝く峰々の美しさと共に、悔いの残る登山だった。」

MHC 登山講習責任者 MHC 理事長 鈴木雅則

5月21日 AM8:00、松本に参加者3名が集合1台の車に同乗し、出発する。天候は快晴。国道158号線を1時間程走り沢渡に到着。ここで1組のご夫婦2名と合流し、総勢5名となり、タクシーに乗り換えて、新緑萌える梓川沿いを走る。

新釜トンネルを抜けると、展望が開け、左に残雪の焼岳、そして道を大きく右に曲がると、青空高く、残雪の穂高岳連峰が望まれる。上高地バスターミナルで下車し、大自然の空気を味わう。出発準備をする青葉若葉の空に、ウグイスのさえずる声が鳴り響いている。



流れる梓川と新緑と残雪の穂高岳

河童橋からの梓川と焼岳

河童橋袂で記念撮影

AM10:00 準備を整え、リュックを背負い、バスターミナルを出発する。雪解け水を集めて飛沫を挙げて流れる梓川、その流れに架かる河童橋から残雪の穂高を仰ぐ。ここから右岸沿いに木道を歩き、明神へ向かう。支流に泳ぐイワナを見つけては歓声を上げる。1時間30分ほどで明神に到着。嘉門次小屋の囲炉裏端に陣取り。イワナの塩焼きに舌づつみを打ち、冷たいビールをコップ一杯づつ飲み交わす。「うまい！」



オオカメノキ



河童橋袂から望む奥穂高岳 3190m

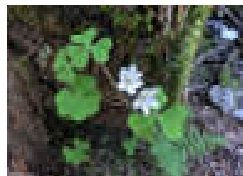
梓川右岸の木道を明神へ向う

嘉門次小屋の岩魚焼き

20分程の休憩の後、明神橋を渡り、梓川岸辺に日陰を探して、昼食を摂る。昼食後は梓川左岸の林道を徳沢に向うこととする。この付近からは、ニリンソウ、シロバナエンレイソウが一面に咲き、心臓破りの坂の道端にはサンカヨウ、ツバメオモトなど白い花々が咲く。梓川岸辺の近くの林道脇には、コバルト色のエゾムラサキ、薄紅色のベニバナイチヤクソウが姿を現すと、前穂高岳の先鋒が望まれ、PM2:00 ハルニレの新緑に覆われた徳沢に到着する。



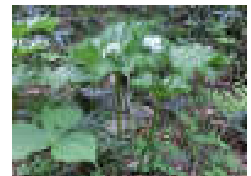
林道端に群落するニリンソウと大村ご夫妻



カタバミ



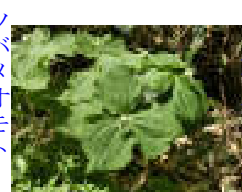
クルマバツクバネソウ



サンカヨウ



ツバメオモト



シロバナエンレイソウ



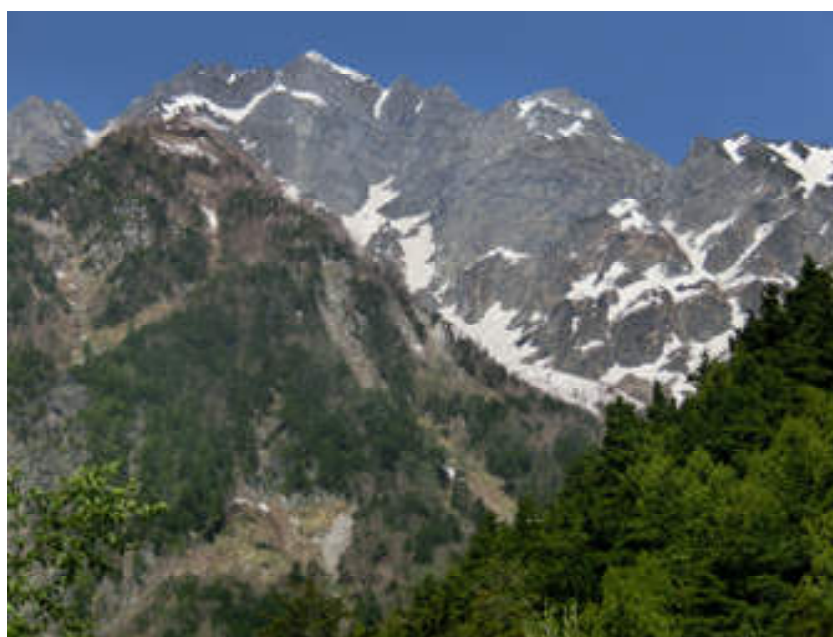
エゾムラサキ

改装なる徳沢ロッジで宿泊手続きして荷を置き、煎じてくれた熱いコーヒーを啜り、今日の疲れを癒す。見上げる残雪の峰々と香るような新緑のみずみずしさ、そして咲き競う花々に、心洗われる気持ちとなる。

22 日、鳥のさえずりの朝を迎える。朝食後、AM8:00、準備を整え、軽荷でロッジを出発。梓川左岸をさらに奥に進む。20 分程で新村橋に到着。揺れる橋を渡り、奥又白登山口へ向かう。ダケ樺林の枝越しに、前穂高岳東壁の大障壁が近づいてくる。小説「氷壁」の舞台となったところだ。その反対側を振り返ると、蝶ヶ岳の稜線が間近に迫ってくる。登山の歴史となった舞台に立ち、感慨ひとしおだ。



朝焼けに燃える穂高岳、明神岳と早朝の徳沢テント場



奥又白登山口付近から仰ぐ、前穂高岳東壁

この後、同じ道を引き返し AM10:00 徳沢に帰還。花々の咲く左岸の林道を歩き、明神、小梨平を経由して、PM12:00 バスターミナルに辿り着く。2F の食堂で昼食を摂り、PM1:00 タクシーに乗り込み、PM1:30、沢渡に到着、ここでご夫妻と別れ、PM 2:30 松本で最終解散としました。「青い空と上高地の新緑と穂高岳の残雪、そして花々の多さを再認識した、大満足の山旅だった。」

MHC 登山講習責任者 MHC 理事長 鈴木雅則

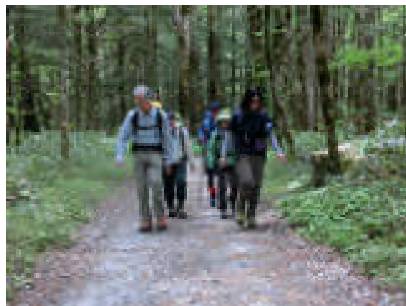


河童橋畔から望む、梓川の清流と残雪の穂高岳、



徳沢のハルニレの大木とニリンソウ群落

6月4日 AM5:00 快晴の松本に参加者6名が車に乗り合わせて出発。AM6:00 沢渡で2台のタクシーに乗り換え上高地へ向う。上高地では、新宿からの直通バスで参加した1名を加え、総勢7名となって、準備を整え、AM6:00 上高地を出発。横尾までの林道を進む。道沿いには、ラショウモンカズラ、ベニバナイチヤクソウ、エゾムラサキの花々が、朝陽に照らされ咲いている。



上高地、横尾間の林道に行く



徳沢附近に咲くベニバナイチヤクソウ



大曲附近の登山道

横尾からは梓川溪流沿いに進む。一ノ俣、二俣の橋を渡り、ニリンソウ、サンカヨウ咲く、緩やかな登りの登山道に行く。満開の山桜を右に見て、石段を昇ると林の中の槍沢ロッジに到着、この日泊す。

5日快晴の朝を迎える。AM6:30 ロッジ前方に、今日目指す槍ヶ岳の先鋒が望まれ、皆氣勢を上げ、出発する。森林の中、登り30分程のババ平で小休止、例年この上部からは、残雪を踏んで登るが、雪が溶けてしまい大曲りまで夏道を進む。大曲からしばらくの登りでデブリの雪跡があり、アイゼンを装着し、槍沢の雪斜面を登り続ける。

グリーンバンド（這松帯）下部急斜面も夏道が露出し、岩礫帯の登山道を登る。AM11:00 グリーンバンドを乗越し小休止する。途中水場から汲んだ冷水を呑み、ほっと一息ついて見上げると、雪の槍沢上部に三角錐形状の槍ヶ岳が美しく天を突いて聳えている。2時間程で槍沢を詰め槍の肩に登り出る。



グリーンバンド下部、岩礫帯を登る



グリーンバンドから埋まる残雪

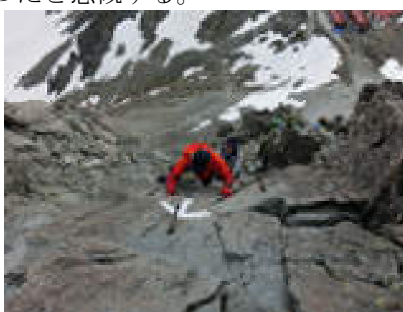


アイゼンを効かし残雪の槍沢を登る

早速、荷を置き、槍ヶ岳の100mの岩峰を目指す。一枚着こみ、防風ヤッケを被る。道案内の白ペンキに従い、岩場を攀じり、鉄ハンゴを昇り、岩に打ち込まれた鉄ピンにスタンスを確保し、体を迫り上げる。青空に伸びる長い鉄ハンゴを登り切ると PM1:45 槍ヶ岳に全員見事登頂する。「おめでとう!」。眼下を望めば、長い槍沢ルートとの苦闘だったと感慨する。



東鎌尾根を登る



槍ヶ岳岩峰 100mを登る



AM8:45 槍ヶ岳山頂 3180mに見事登頂

山頂からは、西方に残雪頂く笠ヶ岳が望まれ、その後方に加賀の白山を眺望する。北に鹿島槍、爺ヶ岳、東に鷹揚な稜線の常念岳、蝶ヶ岳、南に霞む穂高連峰など、遠望は効かないが、穏やかな日和の中、中部山岳の山々を展望する。皆、写真を撮りあったり、山の名を懐かしんだり、このひと時を味わう。山頂に30分程の憩いの後、岩壁を慎重に降下し。槍肩に建つ槍ヶ岳山荘に、泊す。



残雪頂く笠ヶ岳、その後方に加賀の白山を眺望



6日槍ヶ岳肩から夜明けを迎える。

6日 AM6:30 下山開始。稜線からは、岩間に残る雪斜面を降りることを避け、夏道を降下する。殺生小屋付近からは、埋まる残雪をシリセードで一気に滑り降りる人、アイゼンを穿いて一歩ずつ降りる人、それぞれ雪の槍沢を楽しみながら下山していく。例年より、残雪が少なく岩が露出しているため下山に手間がかかる。PM10:30 槍沢ロッジに到着する。中休止後は横尾を経由して、PM4:15 上高地、タクシーでPM5:00 沢渡へ向かい、そこから車に同乗しPM6:00 松本へ帰還、最終解散とした。

「6月の残雪の槍ヶ岳は、雪の大斜面を克服して登頂する喜びを、心底味わった登山だった。」

MHC 登山講習責任者 MHC 理事長 鈴木雅則

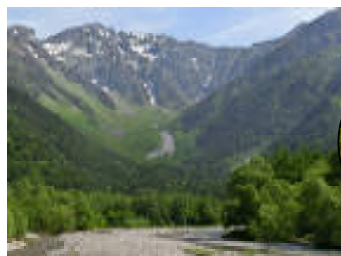
6月11日 AM8:00、上高地アルペンホテルに4名全員が集合し、内田良平さんを講師に写真教室の講習が始まった。講師の挨拶と撮影要領の説明の後、AM8:45、カメラ機材を担って、梓川右岸の土手から河原に降り、焼岳を撮影。河童橋を渡り、左岸沿いに小梨平方面へ向う。上空は快晴。雪解け水を集めて流れる梓川、その川岸のケショウヤナギは、萌えるような新緑に染まっている。参加者は、内田さんから適切な撮影指導を受け、三脚を立てては、撮影のシャッターを切る。



梓川右岸の土手に行く



河原から焼岳を展望



河童橋畔から穂高を仰ぐ



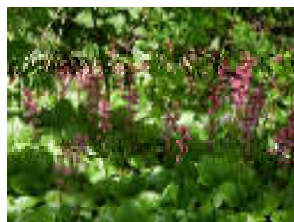
小梨平では、食堂に入り、熱いコーヒーをすすりながら一息つく。しばらくで小梨平から引き返し、梓川左岸を歩く。上空聳える残雪の穂高岳を撮影しながら、田代橋から右岸を歩き、アルペンホテルで昼食を摂り、PM12:30 昼食後、新緑の上高地を後に、乗鞍岳へ向かうことにする。PM1:30 今日の宿、乗鞍岳を仰ぐ番所のペンション「ほうき星」に到着。陽が陰る前に、早速一ノ瀬園地に向かう。一ノ瀬園地は、薄紅色に咲く鬼ツツジが、今を盛りと咲き誇っていた。皆、先を急ぐように撮影を始める。



梓の清水と河童橋と穂高岳



白樺と残雪の穂高岳



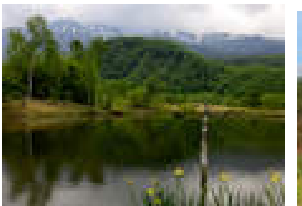
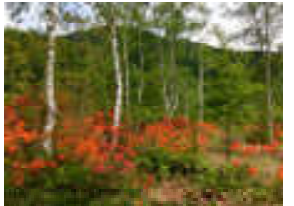
ベニバナイチヤクソウ



梓川と新緑と六百山

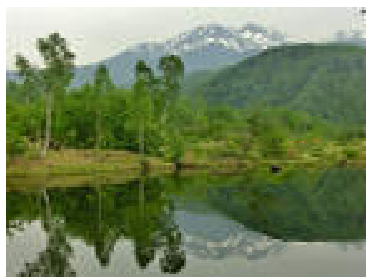


一ノ瀬園地のツツジと乗鞍岳と白樺林と池



湿原と乗鞍岳

撮影に堪能して、PM4:00 宿へ戻る。夕食後、食堂内で今日撮影した作品をパソコンとプロジェクターを使用し、壁に映し出し、内田良平さんから講評を受ける。PM9:00 過ぎまで山岳撮影談義が行われた。



一ノ瀬園地の池と乗鞍岳



鬼ツツジと乗鞍岳



乗鞍岳の高原



レンゲツツジ咲く乗鞍高原一ノ瀬園地



一ノ瀬園地ツツジ園からの乗鞍岳

6月12日 AM4:00 起床、空は快晴の朝を迎える。朝飯前、各人機材を持って、昨日の撮影場所へ向い、シャッターを切る。朝食後は、もう一度大展望を期待して一ノ瀬園地へ向かう。PM11:30、番所まで下り、いがやスキー場麓のレストランで、全員ザルソバで腹を満たす。その後車に同乗し、PM2:30 県松本合同庁舎駐車場で解散。PM3:00 前松本駅に内田さんを見送り、最終解散とした。

MHC 登山講習責任者 MHC 理事長 鈴木雅則

6月18日(土)AM6:00、8名が1台の車に乗り合わせて松本を出発、天候は快晴。一路、中央高速道路を走り、須玉インターで降りる、ここで待機していた1名と合流し、総勢9名となって、2台の車に同乗し、小一時間山道を走ると、AM7:45 瑞牆山荘登山口に到着する。準備を整え AM8:15 出発。森林帯を抜け、登り1時間で富士見平小屋、さらに1時間で大日小屋脇を経由してシャクナゲ林の急坂を登る。しかしどうやら花々は、高い気温と風雨により、盛りを過ぎ地面に散ってしまっていた。



森林帯を抜け、富士見平小屋へ



岩峰大日岩付近のシャクナゲ



急登路を登る

登り30分で100mの岩峰大日岩脇を過ぎて、さらに急登路を登り続け、途中林の中で昼食を摂る。中休止後、森林帯を30分程登り詰め、砂払ノ頭と呼ばれる岩稜線に登り出ると展望が開ける。

瑞牆山が後方眼下に望まれ、その西北彼方に八ヶ岳の青いシルエットが望まれる。花崗岩が積み重なった岩稜線では、滑らぬように注意し、クサリを頼りに登り、あるいは這うように攀じって登り続けると、眼前に大きな岩塔、五丈岩の姿が近づいてくる。



瑞牆山を眼下に岩稜線を登る



岩塔五丈岩の姿

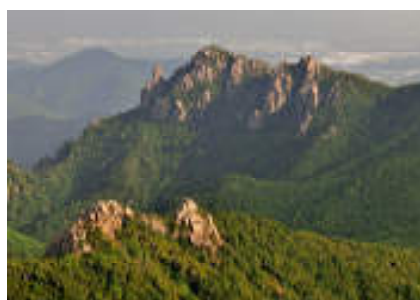


金峰山の頂に全員登頂「バンザーイ！」

五丈岩を右に見上げ、疲れた足取りで岩石群の悪路を登り詰めて行くと、PM2:00 標高 2599mの金峰山の頂に全員登頂する、「バンザーイ！」。山頂で20分ほど休憩後、頂上の直下に建つ金峰山小屋に下る。PM3:00 全員到着、泊す。小屋内では寝床も決まると、談話室に皆集まり、自己紹介などの後ウィスキーやビール等を飲み交わし、ほっと一息つくことができた。明日の好天を祈って、AM8:00 就寝する。



夕焼けの金峰山



朝日に輝く瑞牆山



大日岩の大岩を下る

6月19日(日) AM4:30 起床。雲海が広がり上空は晴れ、八ヶ岳が雲海上に浮かぶ。朝食後、準備を整え、AM6:30 出発する。岩稜線を慎重に下降し、シャクナゲ林を抜けて、AM9:30 富士見平小屋へ到着する。中休止後、AM9:45 瑞牆山を目指して、いざ出発する。歩き出すと木々の間から、瑞牆山の大岩峰群がそそ

り立って見える。森林帯の中、一旦下降し、一休みの後、沢筋の悪路をひたすら登る。



木々の間から瑞牆山大障壁を望む



沢筋の悪路をひたすら登る



大岩の間を抜け、登る

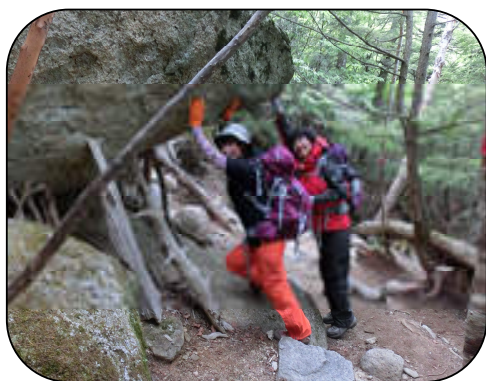
シャクナゲ林が谷間を覆う暗い急登路。倒木を越え、大きな岩の間を抜け、一步、一步急坂を登る。山頂近くの鞍部から、北へ回り込み、岩場に架けられたクサリを頼りに、体を迫り上げて、シャクナゲ林のトンネルを抜けると、PM12:00 瑞牆山頂 2230mに見事登頂する。「おめでとう！」登って来た反対側は数百mの大絶壁となっていて、眼下を覗くと身が震えるようだ。



霧に見え隠れする神々しい金峰山 2599m



小雨の中、見事全員瑞牆山山頂 2230mに登頂



おっと危ない、転がりそうな大岩を、手で支える？



眼下は数百mの大絶壁となっている

小雨降る天上のような頂に、雨具を着て 30 分程憩い、昼食後下山を開始。往路と同じ登山道を、緊張しながら下降する。PM2:00 富士見平小屋に到着。小休止後、軽い足取りで森林帯を下り、PM3:00 登山口に無事到着する。そこから車に再び同乗し、往路と同じ道を引返し、須玉インターから高速を走り、PM4:30 松本へ到着、解散とした。

「シャクナゲ林に彩られた金峰山と瑞牆山、その美しさと足元の悪い岩石群の登降を学んだ登山講習だった。」

MHC 登山講習責任者 MHC 理事長 鈴木雅則

7月2日 AM6:00、松本に参加者12名が集合し、3台の車に乗り合わせ、出発。高速道を走り、諏訪南インターで降り、広大な八ヶ岳山麓を登る。AM7:00 最終美濃戸口バス停前で2名と合流し、総勢14名となり、無舗装の林道を美濃戸近くまで車で入り、準備を整えAM8:00 美濃戸から登山を開始。



北沢登山道を行く



シロバナヘビイチゴ



コイワカガミ



上空の稜線を濃霧が覆う

天候は時折青空を望む高曇りの天候。林道を抜け、シロバナヘビイチゴの花々が咲き競う、北沢沿いの登山道を行く。赤岳鉱泉で中休止後、行者小屋への森林帯を登る。上空、濃い霧が覆い、いつもなら仰ぐ迫力ある横岳から赤岳への主稜線を望む事が出来ない。道端には、鮮やかな紅色でコイワカガミが輝き、ひっそりとミヤマキスミレが咲く



地藏尾根の急坂を登る



赤岳山頂と展望荘を望む



ウルップソウ



チョウノスケソウ

PM12:30 行者小屋で昼食後、赤岳鉱泉へ登山道に戻るように進み、分岐から地藏尾根のいきなりの急坂を登る。足場を一步一步確保し、取り付けられた人工的な階段を登り詰め、ガレた岩場では鎖も便りに、上へ上へ登り続け、高度を稼ぐ。PM1:00、息を切らせながら、溶岩石を登り詰めると地藏像が安置された主稜線に登り出る。反対東側の展望が開け、奥秩父の山々の稜線がシルエット状に望まれる

稜線では、心地よい東風を受け、見上げる前方に、霧が舞う主峰赤岳を望む。稜線を歩き、途中、風を避けて赤岳展望荘で小休止する。目指す赤岳を登り始めると、道端にはオヤマノエンドウ、チョウノスケソウ、ミヤマシオガマ、キバナシャクナゲなど花々の多さと可憐に咲く姿に感銘する。



横岳、硫黄岳を背景に赤岳頂上直下を登る



キバナシャクナゲ



ミヤマシオガマ



赤岳山頂 2899mに見事登

岩場の浮石に注意しながら、取り付けられた鎖を頼りに、岩場にスタンスを確保し高度を上げる。振り返ると、ハヶ岳の美しい主稜線が、快々しく北方に伸びていく。岩峰群の横岳、なだらかな硫黄岳の稜線、その後方に双耳峰天狗岳、小さな富士のような蓼科山、さらにその北方彼方に青い浅間山が霞んでいる。

赤岳頂上小屋前に荷を置き、岩稜線を慎重に進むと、PM2:00 主峰赤岳 2899mに全員登頂する。山頂三角点に手を置き、登頂を確認する。山頂からは、南方向に北岳、甲斐駒ヶ岳。鋸岳など南アルプスの峰々が霞む雲間に見え隠れしている。この日赤岳頂上小屋に泊す。夜半、雨が降りだした。



花畑と阿弥陀岳



阿弥陀岳の難所を登る



阿弥陀岳 2805mへ全員見事登頂

翌3日、濃い濃霧と強風の中、AM6:30 赤岳頂上小屋を出発。中岳を乗り越し、阿弥陀岳の鞍部に荷を置き、軽荷になって、岩場を登攀する。25分程急峻な岩場を登攀すると、なだらかなガレ場に出る。10分程で、三角点や道標、岩の像が立つ阿弥陀岳山頂 2805mに全員見事登頂する。「おめでとう！」



主峰赤岳から望む阿弥陀岳 2805mと眼下に茅野、諏訪の盆地を望む

濃霧の為視界は全く効かない。しかし皆“心地よい満足感”を味わっているようだった。下山は難なく下降し、AM10:00 行者小屋、AM10:40 赤岳鉱泉で昼食後、北沢ルートを下り PM2:00 美濃戸山荘到着。その後は昨日の往路を復路にして、PM4:00 過ぎ松本へ無事到着、解散とした。「手強い峰々を縦走し、一気に踏破した喜びの余韻」を残す登山だった。

MHC 登山講習責任者 MHC 理事長 鈴木雅則



八ヶ岳主稜線を行く、



夜明けの富士山（北岳山荘付近から）

2016MHC 登山講習 夏の北岳(3193m)登山 報告

7月16日 AM6:00、県松本合同庁舎へ15名が集合し、3台の車に同乗し、松本を出発。高速道路を走り、伊那インターで降り、県道国道を走り、仙流荘前の南アルプス林道バス停へ向かう。そこで待つ1名と合流し、総勢16名となって、AM8:05 発のバスで出発。北沢峠からは南アルプス市営バスに乗り換え、広河原へ向かう。AM10:10 到着。野呂川に架かる橋を渡り、準備を整え AM10:30 広河原を出発する。



ミヤマキンポウゲ



野呂川に架かる長い吊橋を渡る



森林帯の急坂を喘ぎ登る

上空は、高曇り。時折林間から明るい陽が射す天候。いよいよ南アルプス最高峰北岳の奥深い山麓を進む。八本歯との分岐から御池小屋への急坂を登る。道端にはカニコウモリ、ゴゼンタチバナの白い花が咲く。1時間半ほど喘ぎ登り、その後緩やかな山道を小1時間進むと PM2:00 今日の宿、白根御池小屋に到着。泊す。お池周辺では、多くのテントが張られ、大勢の登山客で賑わっていた。



北岳を望む白根御池小屋テント場



草地の急坂を登る



稜線近くを登る

17日、夜半に雨が降る。AM5:00の朝食後、雨が上がり、周辺は濃霧状態。AM6:15 雨具を着用して出発する。ハクサンフウロ、ミヤマキンポウゲ咲く、濡れた草地の急坂を登る。視界の効かない霧の中、1時間半も登るとダケカンバ、ナナカマドが群生する低木帯に登り出る。八本歯への分岐を左に見て登り進むと、急に明るくなり、這松広がる稜線に登り出る。しかし周囲は霧が濃い白い世界。晴れていれば北東に白砂を頂く甲斐駒ヶ岳 2965m、その西に大きな山容の仙丈ヶ岳 3033mが望まれるはずだが・・。



視界の効かない濃霧の白い世界を行く



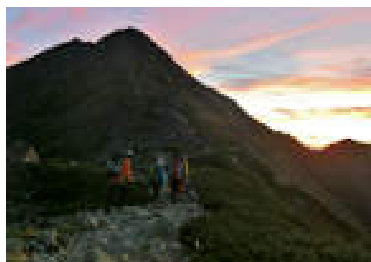
霧雨が舞う岩稜線を登る



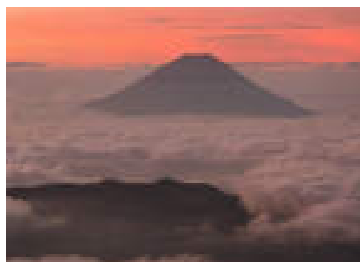
日本第二の高峰北岳山頂 3193m

冷たい西風に吹かれながら視界の効かない岩稜線を進み、稜線上に建つ肩の小屋で一休み、とうとう降り出した雨降る岩稜線を登り続けると、AM10:00 日本第二の高峰北岳山頂 3193mに全員が見事登頂する。「おめでとう!」。風雨を避けて山頂に憩う皆の笑顔がまぶしい。晴れていれば南方に重厚な稜線が続く間ノ岳 3190m、その右に孤高の峰塩見岳 3047mの美しい姿が望まれるはずだった。

山頂からは、狭い岩稜線を慎重に降下する。ヤッケの防風頭巾をかぶっていても、雨まじりの西風が針で顔刺すように痛いほど吹きつける。PM12:00 に北岳山荘にようやく到着。宿泊手続きをして、寝場所を確認し、濡れた衣類を着替え、ひと息ついて昼食を摂る。外に出てみると、雨交じりの濃霧があいかわらず空に舞いあがっている。思案して今日の午後予定の、間ノ岳 3190m 登山を中止とする。



夜明け前、出発する登山者



東の空を橙色に照らして太陽が昇る



ミヤマオダマキ



ヨツバシオガマ

皆も登山中止を納得して、北岳山荘にこのまま沈殿とする。落ち着いたところで、配布した資料を使って高山病対策等の講習をして、あらためて全員の紹介をする。後は、夕食まで自由時間とする。有志が食堂に集まり、酒宴を開く。他の一般登山者も食堂に集まり、耳を塞ぐほどのやかましい騒ぎだ。夕食後、我々は、明日の天候を期待して、静かに就寝する。



北岳山荘テント場からの富士山

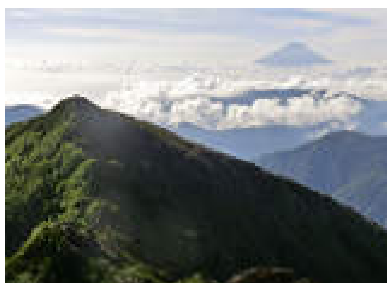


間ノ岳を背景に八本歯へ向かう

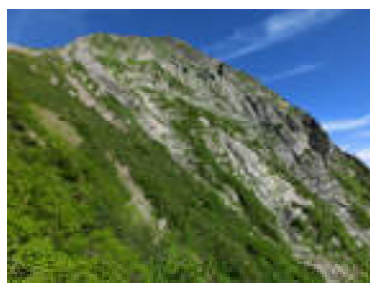


八本歯へ向かうざん道に行く

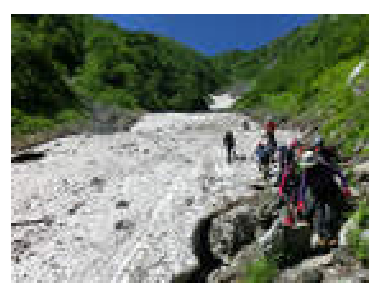
18 日快晴、AM4:45 東の空一面を橙色に照らして太陽が昇る。大きな裾野が広がる富士山が薄紅色に輝いている。AM6:30 北岳山荘から下山開始。高山花が咲き競う北岳東斜面をトラバース気味に進み、八本歯コルに向かう。風雪にさらされた丸太のざん道が幾つも架けられていて、踏み外さないように、慎重に渡る。小 1 時間でコルに到着。ここからも遥か眼下の大樺沢への丸太梯子の急降下が続く。



八本歯上部からの富士山



北岳東面のバットレスの大岩壁



大樺沢を下る

急降下する梯子から振り仰ぐと、北岳東面のバットレス大岩壁が、目の前にそそり立っている。痩せ尾根に架けられた高度差 200m 程の丸太梯子が終わると、岩石のガラ場を降り続ける。御池小屋への分岐を過ぎた頃から、森林帯に入り、AM12:15、ようやく広河原小屋に到着する。「ごくろうさんでした。」PM12:30、南アルプス市営バスに全員乗り込み、北沢峠を經由して、PM2:15 仙流荘南アルプス林道バス停に到着する。1 名とはここで別れ、15 名は 3 台の車に同乗し、往路と同じ道を走り、PM4:00 松本に帰還、最終解散とする。「南アルプス三千m 峰の大きな山容を、心身とも味わいつくした登山だった。」

MHC 登山講習責任者 MHC 理事長 鈴木雅則



間ノ岳 3190mの威容、



八本歯へのざん道を行く



「ミヤマオダマキ」

MHC 登山講習「夏の北岳」から 2016. 7 撮影 鈴木雅則